

昭和二十四年七月二十三日発行第

(每月一回・十五日発行) 可

(通第一四四号)

慈光

第十三卷 第三号

次	目	世 諦 即 真 諦	近 角 常 觀 (1)
		善 知 識 を 訪 ネ テ	福 島 政 雄 (10)
		— 甘 露 火 王 —	
心	と	真 実	佐 藤 強 三 郎 (15)
— 人 生 と 信 仰 —			
正 信	偈 私 解	白 井 成 允 (20)	

世 諦 卽 真 諦

——人 生 と 信 仰 ——

近 角 常 觀

今日の題は、セタイ世諦すなはち真諦というのであります。

この諦という字は少々むつかしい字ですが、まず一言でいうと、真理という意味である。即ち世諦とは世間の真理諦とは真実の真理、即ち仏の眞面目、世間に對して出世間の真実の有様を申します。是はまた真諦、俗諦ともい、世間、出世間ともいって、仏教上広く用いられています。

今日はその真俗二諦の關係を話してみたいと思います。

真宗に云う處の真俗二諦は、真諦は安心立命をいい、俗諦は法律や世間の道徳に隨うて行くのを俗諦といいます。又真諦門、俗諦門という言葉もあり、真宗に於いてはこの二つは車の両輪、鳥の両翼の如くで、是非に揃わねばならぬというて居る。即ちたとえ安心立命しても又世間にかえり世に従うというのが蓮如上人以後の教で、確かに角たてず行つて、しかも心に安心を得ているのが仏法者の振舞としてある。しかしこの真諦俗諦の言葉は蓮如上人以後に出来たものである。

さて私の話は結句は今の通りであるが、先ずそこに到るまでの道筋を委しく話しましよう。広き意味でこの二諦を

いうときは、世間、出世間とも、仏法世間ともいうてよろしい。今日の言葉では信仰と人生ともいうてよろしいのです。先日発行した『人生と信仰』の文を引つくるめて一言でいえば、つまり真俗二諦となるのです。

ところで信仰問題の上に於いて現今必要なるは何であるか、人生の上に信仰を見る。世諦を離れずに、即ち今其上に真諦の光を見るのであります。

今日社会の人々、即ち政治家にしろ、実業家にしろ、宗教の考はなくして、ただ世間の立場で世間を眺めている。そうしてその世間以上に偉大なる信仰の生活がある、出世間の安心立命の大なる光があるということは、大抵の人は見ていない、いわゆる世間的生活のそのまゝに終つているのです。

しかばば今日、宗教とか信仰とかいうている人はどうかというに、全く世間から遠ざかつて居つて、信仰安心の問題が世間の問題と別になり、世間は世間である、信仰はその上に、他に一つ修養するのであると思うてゐる。故に信

仰が人生と關係がなくなつて、殊更に世間をはなれて求めると、いう様になつてゐる。要するに真諦と俗諦が別に切れる様に思われます。

このことは筋を押して行くとどこまでも行く。如何にも信仰はかくの如くである。世間はかくの如くであると二筋に考え易い。これが二つになつて居る間は眞の信仰問題はむずかしいのです。

抑々大聖世尊が法を説かれたはじめ、若し世間の道徳、或は學問で充分ならば何ぞ出世間の教を説かれましよう。当時の印度のバラモンの考にせよ、又当時の印度の社會状態にせよ、それで満足出来るならば、仏法は要らぬのです又、生老病死も気にとめないで居られるなら、宗教は要らぬのです。

然るに大聖釈尊が始めて仏法を説かれたといふは如何であろうか。如何にしても世間そのままの上に安心することが出来なかつたから出家せられたのです。も一つ云えれば世間の上に安心を持ち来つたのが出世間であります。世間に安んずる能わず、これを打ちやぶりて此處に出世間の大道が開けるのであります。

人生は苦である。生老病死一切みな苦である。人生何の光もない、我々はすこしの光も人生上にみとめずして、ただ苦の世界であると思うてゐるのであります。然し苦し

む所以のものは、自分の煩惱のために世を苦しんでいるのである。が、この人生の上に一度無明がなくなり煩惱が晴れば、直ちに人生その上に解脱涅槃の大平和が來るのです。一度無明の妄念が去れば、生は初めの生、老は初めの老、死は初めの死、信仰が來たとて生老病死はなくなるのではないか、其上に大平和の解脱涅槃、何等の苦もなき大平和の境が來るのであります。これが眞の真諦の味わいであります。

我々では解りませんが、釈尊の教も人生の上に直ちに人生以上の光が來るのです。故に仏教の要点、信仰の要点人生問題の極致はこの苦しき人生をすぐに信仰を以て解決し其上に真理の光を見、其上に真諦の光が現われる点です。そもそも釈尊を初めとして世々の祖師方の教も、みな世間の上にすぐさま、絶対の光があらわれてくることです。故にこの真諦が來つて眞の歎びが來たりた時、その歎びは決して人生以外に存するのではない。世間は世間で、先の如く風波はあれて居る。しかし大平和の境は其他にあると思つてゐるのは間違ひです。生病老死の人生の上に、初めは一切苦であるとおもうてゐた事が、何ぞ苦たらんと解脱して歎ぶ時、直ちにその世間の上に光が現わされてくる。これが仏教の根本義であります。仏の教はここでありこの世間をはなれて仏法あるに非ず、この世間の上に光がないのは

真諦ではない。

さてかくの如く簡単にいうて了えば何でもないが、さてこれがなか／＼むずかしい。そこで一つ必要なことは、今真諦世諦、世間出世間と二つならべていえ、世諦世間がくだけてから真諦出世間が現われてくる様に思うかもしね。世間そのものの上に出世間の味があらわれてくるのが出世間で、世間と出世間とは区別して二つあるのでない。もし二つあるならば、世間出世間とは云わぬ。又真諦俗諦もそうです。俗は真でないから俗なのです。其俗諦が碎ければ真諦である。これが要点であります。世諦の上に真諦をくつづけてかくの如く思い考えたりなどしているのでは駄目です、信仰の味はわからぬ。

人生の苦楽種々である。その苦しみ、悲しみ、喜びをみて、其処に打捨てゝ真諦に行けるならよろしい。しかし悲しい故に、苦しい故に、ここに絶対の光を考えて、これで自分をなだめ、すかし、これを考えて悲しみを誤間かすのならば、眞の光をみたとはいえぬ。これは世間の上にかりに仏をくつづけたので眞の光で俗を破つたのではない。これでは眞実の信仰は解らぬ。

一つわかり易い例を出ししましよう。既にみなさんが新聞で御覧になつたるうと思いますが、数月前、短気な下女が

殺すという氣なしについ誤つて穩居を打ち殺したという事がありました。その女は遂に牢へいれられました。処が昨日其女に法話をしましたら大変安心の様子でした。私も驚きましたして聞いてみると、その女のいには
「ただ自分のようなものはいたしかたのないもので、仏にただよらねばならぬといつたのです。此の十七日の晩に夢の中に觀音様があらわれて、お告げなさるには、お前がいろ／＼思つても此の人生はあてにないに感じまして、實に人生はあてにならぬとわからして頂き、ただ念佛しているのであります」

と、極めて簡単に云いました。私も彼女の言う事があまり立派すぎる故、「その仏は死んだ後はどうして下さるのか」と聞きました。彼女は茫然としていました。そこで「未

來もよき様に助けて下さるのだ」と言いきかせましたら、大層よろこんで居ました。

たつた一言、人生はあてにならぬ、仏より外にないと気がつく動機です。世間が破れて出世間が来る有様はこの一例で解ります。世間で捨てられて初めて光が見えるのです勿論此女はまだ、一審にもなりません故に、宣告をうけた為に世を捨てたのではない、考えた故に其処へ行けたのです。仏の御導きによつてかく樂になられたのです。如何し

ても世間にすてられて出世間の花が開く、從来の世間が破れて真諦が来たのです。処が今日の人は、先ず世間に対する考え方があつて、其考を生かすために信仰を得ようとして居る、これではいけません。

唯、世間は真実仏陀の恵み一つである。是より他に一切のものはあるにならぬ、名譽、財産、地位、時間、これ等は決して人間に力とはならぬ、力となるは仏の慈悲一つであります。

世に一点の未練がなくなつて、悉く真宗の絶対の仏陀の恵みの中に入らせて貰つた時、ここが出世間であります。これが眞実の信仰であります。

サア仏教としては此処は要點である。いろ／＼宗派はあるが、みな一つである。世間には一点の余地なくなつて眞實にかえる、これ安心問題の極致であります。

さて次に、それならどうしてかくの如くなれるか、といふことであるが、そこで一寸考え方のは、世を捨てなければならぬ、世を捨てゝ仏に帰せねばならぬ、と此の考であります。それ故、漸々、仏教発達と共に世を逃れて山に入り、世の財産、名譽を捨てて、剃髪して仏弟子となると風の傾向が盛んになつて、出世間の道が大に著るしくなつてきました。ところでこうなつての考は世を捨てて出

世間になるというのであるから、世を捨てて別に出世間の社会を作ることとなります。そこでいろ／＼世間と出世間との二つに別れる様になります。

是を一人の信仰の上にあてゝ考えてみますと、眞に仏陀のめぐみが戴ければ、我々はいかになるかというに、人生ことごとくが仏陀の御恵みとなつて、真諦の味は世諦となる處がないのであります。

そこで先よりいう如く世間を生かして真諦に入らぬもいかんが、さて真諦に入ったものが、再び世諦に出ることが出来ぬのもいかぬのであります。

つまり人生のすべての問題を仏陀の光明で照らして頂くと世間を外にして、仏陀の恵みのあらわれる處はないのである。

真宗とは如何であるか。親鸞聖人の言われるには、真宗とは仏陀の眞実である、仏陀の真髓である。善導大師の御ことばで云えば「念佛成仏是真宗」であります。仏陀の御みぐみをよろこぶのが真宗であります。真宗の眞実、即ち仏の恵みは何の上によろこぶのであるか。我々がこの腹を立て、愚痴をおもい、欲を起こす、其の心の上に直ぐに仏陀の恵みをよろこばせて貰うのであります。親鸞聖人の示したまう眞実のめぐみは、この人生を離れて他に味わうの

ではあります。世間の上にも出世間の上にも、人生すべての上によろこびがあらわれて下さるのです。

今これを御文について伺うてみますに、『信卷』に於いて、真実の御釈の下に、善導大師の

「内外明闇を簡ばず、みな眞實を用いよ」

との御言葉がひいてあります。聖人はこれを引いて宣わく

「釈に不簡内外明闇といえり。内外というは、内は即ちこれ出世なり。外は即ちこれ世間なり。明闇というは明は即ちこれ出世なり、闇は即ちこれ世間なり。又明は即ち智明なり、闇は即ち無明なり。涅槃經に曰く、闇は即ちこれ世間なり、明は即ち出世なり。闇は即ち無明なり明は即ち智明なり」

これ親鸞聖人の眞實心の釈である。

内は即ち出世、外は即ち世間。両方に通じて眞實なる故であるというのであります。どの点から伺うても有難い。

仏陀の広大の恵み、絶対の恵みは、世間であろうが、出世間であろうが、僧侶でも俗人でも、すべての上にひとしくうけるのであると。聖人はかく見られたのであります。

即ち世を捨てて出世間に入らねばならぬというてはいるがさて尽十方無碍光如來の御恵みは、我々の俗生活の上に宏大的めぐみをきかして貰つて、我々の煩惱の上にも、仕事をするにも、何もかもの上に遍ねくうける恵みであります

故にこの眞實の御まことに気がついたのが信仰であります親鸞聖人のしめしたまう仏陀のめぐみは、今いうごとく世間の上にすぐ現われるであります。ただ仏陀の恵みに気がつかして貰い、一處にすませて貰うて、そのめぐみを一代のみならず死後までもよろこぶことが、眞實の教であります。

我々が腹を立てる、いろいろ愚痴を思ふ、みな仏のめぐみに気がつかぬ故である。まようべからざるものに迷い、悲しむべからざるものに悲しみて居るのです。ただ仏陀のめぐみを聞くのが一番大きいのです。その恵みはなにも人生を離れて聞くのではない。なるほど、世を捨ててよろこびに入るのであるが、自分がすてねばならぬとすて行くのではない。仏陀のめぐみを聞かして貰つて、夢の醒むる如く、今迄の迷いを自覺するのです。

親鸞聖人九十年の一代説かれたのはこのめぐみを説かれたのである。その絶対の光を説かれたのである。これが真宗、真諦の極致である。

故に若し人がこの恵みに気づかず、所謂世間的にいろいろ人生に苦しむのは、このめぐみの光に行く道行たるにすぎぬ。一度このめぐみに入れば（否入ればでない、昔より廣大なめぐみの中にいるのを知らずに居るのである）何の苦

もない。聖人は法然上人の御言葉を聞いて、直ちにあゝ気がつかんだと助かる一つであつたのです。そのめぐみは何等の罪障りがあつても一つとして照らさないという処はない、つまり仏陀のめぐみに気がつかぬゆえに、いろいろ迷うのである。若し今迄に此めぐみに気づいているならば決して迷いも苦しみもなかつたのである。否ただに迷いくるしみのみならず、自分でよい事が出来るなどとは思うことはないのである。この御めぐみがわかれれば罪の身にて出世間に入らねはならぬ。自分を淨めねばならぬとする事はないのである。

ただ仏陀の広大のめぐみに気がつけば、如何にしたとて人間の力で行ける筈はないと、仏の広大のめぐみの上にやすんずるほかはない。

仏のめぐみは内外明闇を簡ばず、その御めぐみをよろこぶには世間にいるのも予義ない、しかば、又欲をすて身を清浄にするのもよろしい、そんなことにかかわらず、ただ仰くべきは仏陀のみである。是をよろこばして貰うのが真宗のよろこびである。その広大の光にむかつて、自分は煩惱があるからおがむことは出来ない、というは甚だしき間違いである。世に苦しみいろ／＼するもののために抨める様に仏陀のお慈悲があつて下さるのです。

自分は罪深いと、頻りに出世間にしなくてはならぬとい

うてゐる。大変一寸きくと謙遜の様であるが、自分でものになる気持でいる。そうではない、絶対のめぐみは、誓願不思議、名号不思議、仏のめぐみをうけるゆえに自分が清まらねばならぬのではない、過去の宿業ゆえ千人殺せといわれたとて殺すことも出来ぬかわりに、又百人千人を何時殺すかも知れぬ。ただわがはからいをして仏陀のめぐみをよろこばせてもらう一つ、これが何より有難い。

選撰本願念仏集、南無阿弥陀仏、往生之業、念佛為本。法然上人一代の御教化は、この南無阿弥陀仏のその仏をしらず御教化であります。聖観法印は曰く。

誠に知りぬ、無明長夜の大燈炬なり
何ぞ智眼のくらきを悲しまん

生死大海の大船筏なり

豈、業障の重きを煩わんや

世に仏陀のおわすのは、無明長夜の燈炬である。生死大海の船筏である。その仏のめぐみが我々の船である、罪ある

とも、頼むは広大の仏の御めぐみあり。このめぐみ、この御慈悲、これ人生の光である。聖人御一代の教も、この弥

生死大海の燈炬なり、智眼くらしとかなしむな
生死大海の船筏なり、罪障おもしとなげかざ
實に我々は凡夫である。一歩も動けぬ罪惡の身であるけれ
ども、頼むは広大の仏の御めぐみあり。このめぐみ、この

陀の本願、名号、是れ一つが人生の力なることを教えて下されたのである。

過日来しば／＼申しますが、聖人の一代の喜びはいかに仰せられるか、聖人が日野左エ門の門前に雪の一夜を明かされたときの御言葉に、

「弥陀の五劫思惟の本願をよく／＼案すれば、ひとえに親鸞一人が為なりけり。さればそくばくの業をもちける身にてありけるを、助けんと思し召したちける本願のかたじけなさよ」

と、ただ聖人の眼にみえるは仏の御慈悲一つである。

なおこの歎異抄をも少し申せばよくわかります。

「今また案するに、善導の自身は現に是れ罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかたつねにすみつねに流転して出離の縁あることなき身と知れという金言に少しも違わせおわしまさず。されば、かたじけなくも我が御身に引きかけて、我等が身の罪惡の深きほどをも知らず：（自分が清淨にすると思うのは、自身の罪惡のいか程深いかをしらぬのです）…、如來の御恩の深きことをもしらずして迷えるを思い知らせんがためにて候いけり。まことに如來の御恩ということをばたなくして、われもひともよしあしということをのみ申しあえり。聖人の仰せには、

善惡のふたつ総じても存知せざるなり、その故は如來の御心によしと思召すほどに知りとおたらばこそよきを知りたるにてもあらめ、如來のあしと思召すほどに知りとおしたらばこそあしさを知りたるにてもあらめど：（これは俗諦ゆえいかぬ、これは出世間だからよい、これは道徳ゆえよい、これは不道徳ゆえいかぬ、これみなよしあしをいうのです。しかし眞の善は仏のよしと思召すところ、眞の惡は仏のあしとしたまうところ）：煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのことみなもてそらごとたわごとまことあることなきに、：（世間といふも出世間といふもみなそらごとたわごとです）：ただ念佛のみぞまことにておわしますとこそ仰せは候いしか』

ただ仏陀のみまことである。

世の中にこのまことを一つ頂くのみ真実である。又其一つを知らせんとしたまうばかりが仏の思召しである。このめぐみのうちにわれ／＼を追いこめるために、いままでのいろ／＼の経過があるのです。人生の目的はただこの信仰に入るこれ一つである。

この信仰に入りてみれば、世間の世諦がすべてこの信仰のめぐみに入る道行きである。この広大なめぐみに気づく道筋である、そのめぐみがわかれれば、世のかなしみ、よろこび、すべてみなめぐみをよろこばせて頂く道筋である

のたまわく、

『大師聖人若し死刑に処せられたまわすば、我亦配所に趣かんや、我若し配所に趣かずんば、何によりてか辺地の群類を化せん、是なお師教の恩致なり』

聖人が卅五才まで京都に居られたそのままならば、或は聖人九十年の一生涯の美しきことはなかつたかもしけぬ。越後、常陸、関東等の御苦勞があつて、伝道の出来たのはみな流罪の御蔭で、皆師教の御恩であります。かくの如く聖人の頂かれた味をみると、一つとして眞諦以外にありますせん、世の淺聞しければ淺聞しき上に、佛のめぐみをよろこばれていられる。

誠に知りぬ、悲哉、愚禿鷲、愛欲の廣海に沈没し、名利の大山に迷惑す。

罪深く業深きこの親鸞であると、其上に直ちに広大な佛陀のめぐみをよろこばれたのである。かくなれば何事かめぐみならざらん、聖人は決して世間の生活と出世間の生活と別々しては居られぬ。僧かと思えば俗であり、俗と思えば僧である。

親鸞僧の儀をあらためて俗名を賜う。因つて僧に非ず俗に非ず。然る間、禿の字を以て姓となす。

『主上臣下法にそむき、義に違し、怒を為し仇を結ぶ』念仏の一派をば種々と迫害したその様な大事件も、聖人はれば何を見ても仏の御めぐみの外はない。

大聖おの／＼諸共に、凡愚底下のつみびとを

逆悪もらさぬ誓願に、方便引入せしめけり。

もう提婆、阿闍世の逆害それ自身が、既に大聖おの／＼もろともに、であります。広大なる仏の御めぐみによりてめぐみのうちに引込んで下さる道行きである。逆害そのまゝが仏の御恵みをしらせる御手廻しである。かくの如くなれば何を見ても仏の御めぐみの外はない。

親鸞聖人の御流罪の時、

『主上臣下法にそむき、義に違し、怒を為し仇を結ぶ』念仏の一派をば種々と迫害したその様な大事件も、聖人は

海河に網をひき、釣りをして世を渡るものも、野山に猪を狩り、鳥を捕りていのちをつぐともがらも、あきないをもし、田畠をつくりてすぐるひとも、ただおなじことなり。

と。極端にいえば、猿、漁業すとも、其上に広大のめぐみをよろこびつつ日送りをするが、めぐみに氣附いた所詮であります。聖人は大勢至菩薩、法然上人のめぐみで念佛の一法をとり、又觀音菩薩、聖德太子の導きで弥陀の本願にあわせて貢う。一つとして佛のおめぐみならざるものはない、この他はない、即ち聖人の真宗は世諦即ち真諦である

動もすると此処が取り違えられて、世諦即真諦をば、又世の有様に随つて、真実をまげるのであるとすると大変な間違いである。それなら外儀は佛法のすがたにて、内心外道に帰敬せるものである。佛のめぐみに気がつけば、なにも意識的におもい出さずとも、知らず／＼の間に御めぐみによりて人生一つとして不足なことはなくなる。この人生五十年、百年の一生涯が、唯この佛の慈悲である。

この日常生活の味をわかりやすくさせられたのである、決して真諦世諦は別々に両立するものでない。聖人の和讃にのたまはく、
よしあしの文字をもしらぬ人はみな
まことのこころなりけるを
善惡の字しきがおは
おおそらごとのかたちなり。
是非知らず、邪正もわかぬこの身なり

善知識を訪ねて

福島政雄

敵がなくなること

法華經の例の提婆達多品^{だいぱだつたほん}。あそこを見ますというと、普通には提婆達多は釈尊の敵だというようなことを言っているのに、提婆達多品では、提婆達多は自分の善知識であると釈尊が仰言つてありますから、あの場合提婆達多という敵は、あそこではもう敵でなくなるという、そこが仏教の根本精神であります。これは一寸脇道に入りますけれども、私、後醍醐天皇と足利尊氏のことで、それを感じているのであります。が、後醍醐天皇が吉野の宮でおかれになります時に、右の御手に御剣をお持ちになり、左

るが、佛のすがたである。五劫思惟の本願をおもうと人生何程苦しくとも苦しいなどとは思えぬ。飽くまで罪深く飽くまで横着な我々、唯懺悔の外ありません。しかし、その廣大のめぐみに引き入れるため、十方三世の諸佛諸菩薩乃至人生の上にあらわれて種々のすがたを以て我々を濟度して下さった法然、親鸞等の方々が、私を引き入れて下さったのです。このめぐみに対して自分が悪いの、どうのこうのと、よろこびかなしむのは、勿体ない事です。ただこの佛の御まことに感泣するの他ありません。この佛の御まことを教えたのが淨土真宗というのです。それをよろこぶが俗諦即ち真諦である。實にこの様な深い慈悲をうけて居る以上は、その御恩に対しても、骨を碎き、身を粉にしても報じねばなりません。

如來大悲の恩徳は、身を粉にしても報すべし。

師主知識の恩徳も、骨を碎いても謝すべし。
聖人が越後の雪中で苦しまれた時にも、その苦を苦とせずして御恩を感謝せられた。その上に阿弥陀如來の御姿をあらわせられてある。又我々がこのめぐみをよろこぶ上より働かせて貢うならば、畏れ多けれども其上に佛法の味があらわれて下さるのである。かくの如く人生の上に佛法を味わわせて頂くの、故世諦即ち真諦であります。蓮如上人が『表に王法を本とし内心に佛法をたくわえよ』といふは、

小慈小悲もなけれども
名利に人師をこのむなり。

かくの如く浅見しき身なれども、念佛一つで往生させて貢う。『念佛成仏は真宗』であります。即ち聖人に到りてはじめて世諦、即真諦を我々日常の生活の上に味う様にして下されたのは、實に有難いことである。

求道、參卷拾号、明治廿九年十二月。

の御手に法華經の五の巻を持たせ給うて、八月十六日の明けがた暗い時におかれになつたという、あの太平記の記事を読みまして、ハテ、法華經の五の巻はどんなことであつたろうと聞いて見ますと、それが提婆達多品で始つてゐるのであります。それから私は、非常に嬉しくなりまして、アア後醍醐天皇は、あの逆臣の尊氏というものを最後までお思いになつて、この提婆達多品で、釈尊の敵であつた提婆が敵でなくなる。その様に、今は逆臣と云われている足利尊氏が、いずれの日にか、まことの心に立ち帰つて、忠臣尊氏となる日を希うという、そういう心持で、吉野の宮で

崩御になつたに違ひないと、こういうのが私の太平記の解釈なのです

がかようているのじやないかということを思はせられるのです。

つまり一切の怨敵は自然に散滅、無理をしないで、敵が敵でなくなる。釈尊が提婆達多を自分の善知識である、提婆達多が必ず仮のさとりを開いて、かよう／＼の仮の國を建設するようになる。そこが後醍醐天皇にひびいて、天皇の御臨終というものは、非常に大事な意味をもつ。こんなことを私は聖徳太子の上について、先ずそれを感じますけれども、後醍醐天皇の上にも先ずそれを感ずるのです。忠臣、正成なり、義貞なりを御信頼になつたというのみでなく、その、そむいていたところの尊氏をお思いになつて、どうかこれが転向してくれるようになると、これが最後のお念願となつて、おかれになつたということが非常に尊いことでありまして、日本の國に大乗仏教というものが入りました大事な意味がそこにあるというようなことを思いますのであります。

実際、尊氏が最初に謀叛をした時の後醍醐天皇の御述懐の御製の歌にも

身にかえて思うとだにも知らせばや

この後醍醐天皇の御真筆の色紙が、今もなお如意輪寺に遺つておるのであります。実際尊氏が叛いたけれども自分はこの尊氏を身にかえて思うという、こういうお心持が最初からあつて、いよいよ往生なさるという御臨終は、今のようなであつたと、そういうところに仏教といふものと、日本の國といふものが、いきて生命らべたけれども、結局こういうことになると、あります。

そして、そのあとには偈文がありまして、同じことをくり返してうなうてあります。

嘆德偈の大意

衆生は無毒の風に吹かれて、悪趣の中におちようとする。悪趣と云うのは、地獄・餓鬼・修羅といふのであります。それをこの甘露火王でなければ、とどめることが出来ない。衆生は五欲に執着している、それでむさぼりの事件、それから暴力事件なんかがこれによつて生ずる。さう云うのを甘露火王は、正法、正しい道によつて真実におもむかせられる。國民の中にどんな悪い者があつても、それを自然と真実の道におもむかせるという力を、甘露火王は持つておられる。それで結局どうなるかというと、その國の人民は、甘露火王をいのちと思っている。それから甘露火王はまことの道といふものを、御自分のからだにすつかりとそなえておいでになるということになる。そして慈悲の心をもつて人民に恵みを施して、あらゆる衆生を身も心も潤おすということをなされる。そして甘露火王は人の心を順えてホット息をついで安心するまで人を要してすぐわれる。

王の温言、おだやかな、あたたかい言葉が、あらゆる人々の心をととのえ、そして顔色を和けて、御自分が師と尊ばれる人々につかえ、またその祠祭にはすこしもおこたるというような姿がなく、その福といふものが千万世、ちよろす世のいのちまでも流れます。それで王は人民を本として居られる。人民を根本の大事なもの

それで甘露火王の國は、一切の怨敵自然に散滅して、そしてあらゆる外國からの怨あだというものがこの國に入ることが出来ない

と、こうあります。

三 德に約する

そして今二十一徳をならべたけれども、これを三つの徳につづめるというと、一つには能く珍らしい財物を散じて一切に施しをなさるということが一つ。それから第二にはむしろ自分の身命を捨てても、うそ、いつわりのことを云わない。それから第三には大勇猛、非常なさましさをそなえていて、そのあだかたきをちらやんとおさえる。おさえるというのが今言いましたように、あだかたきが、自然にかたきでなくなるというのであります。

今度は一つの徳におさると、どういうことになるかということがあります。それは甘露火王の大福德と、こう云われています。その甘露火王の大福德によつて、王の國といふものは太平である、平和が続く。そして王様が、ことだてて、これをなさつた、あれをなさつたということがなくて、自然に人民といふものが富み、かつ樂しむとなり、あらゆる國々を化する、教化するということになつて、そして身も心もよくなつて、結局この解脱、一切の煩惱を解脱するというところまで行く。そういうのはつまり甘露火王の大福德によると、こう云うてあります。つまり沢山の徳をな

のとしておられる、したかつて億兆の人民は同一身となる。この同一身の身を、こころの心しんと書かれないので、身体の身の字が書かれています。何千万人、人民があつても、それが一つ身体といふ具合になる。

そしてその人民を愛することは、王自身を愛するが如くに愛される。そして先ず自分をまことの道に率いていかれる。すると人民がそのあとに隨うて来る、そういう風な德化を行われる。

それから、その次に智慧なり、智慧なりを求めるにも触れてあるのであります。牛が水を飲めば乳になる。蛇が水を飲めば毒になる。智慧の學問をすれば菩提の覺さとりをひらく。愚かな字が方をすれば、生死に、生き死にに迷うということになる、そういうことを徹底的に分らなければならぬ。それだからその學ぶといふことをすればあやまちがすくなくなる。それだから甘露火王の國民は大事なおこなことがらになれば、多くのことを聞いて、それを厭いまたは怠ることがないといふことを書いてあります。さあ、その智といふのは知識でもありますよが、どちらかと云えば智慧なのであります。

知識は外にひろがるもの、智慧は内に深くなる働きと、まあこういう風に聞いておりますが、甘露火王の國民は学ぶといふことについても、それは知識もひろめますのでしようが、智慧の境地がひらけて行くという。王がまたそういう風に導かれるというそういうことがあるだらうと思うのであります。

それで、初めから申しましたそこまでが、或る婆羅門が、今甘露火王に会いに行こうとする善財童子をつかまえまして、甘露火王という方はこういう方である、その国はこういう国であるということを、ことこまに述べて聞かせたということになります。

そして、これから善財童子は王に直接に会いに行くのであります。それで婆羅門が善財童子に告げて申しますには「今王様は正殿にいらっしゃつて、教化を施しておいでになる。だからあの王様のところに行つて、一心に王様を仰ぎ見るがよい」ということを告げる。その言葉に随つて善財童子が参ります。そうしますると甘露火王は、壯年盛色とありますから、年はもう壯年期の男盛りというところであります。そして仲々顔色でもなんでも、健康なさかんな顔色なのであります。そして一千の、沢山の大臣が前後にその王のまわりをとりまいて居ります。

ところがそこに非常な光景が見えるのであります。その国の中の多くの人、その國のおきてを犯し、正しい道をまもらない者がいる。人殺しをやつて、人の生命を奪つた者もあり、或は財産を盗んだ者もあります。或は他人の妻を犯した者もある。そしてうそ、いつわり、或は人ととの間を離間する者もある。粗暴なことを行つて、正しい道といふものからずつかりはずれているものがある。そういう種々な悪業を造つた者を甘露火王が处罚しているというのであります。その处罚が仲々ひどいのであります。その罪人を縛りまして、王のところへ連れて行きますというと、その罪に従つて、或は火で焼き殺す、或は熱湯で煮殺す。或は高悪人どもが自分の悪を自覚する、そういう風に導く。今あなたがあそこに見たところの残酷な光景は、実は自分が幻をあそこに現わしているのであって、本当の人間をあんんにやつてているのではない。自分は自分の心でも、言葉でも、たつた一人の衆生でもそれを悩ましたり害したりするということはしないというその心持を持つています。

自分は、そういう風で、この如幻解脱変化の門と云つて、幻のよくなものを見せて、そして解脱をさせる。これは変化の仕事といふ、こういう法門を得てあるばかりでありません。みんなこの世界のことといふものは、幻のようなものであります。菩薩の行といつても、みな幻へんげ變化といふようなもの。それで自分は諸々の世間は悉くみな、幻のような、一切の法は悉くみな夢のようなものであると、こういうようなことを私は心に会得している。この法門より外は、自分は何も知らないのでありますというのであります。

そこで甘露火王のところが終るのであります。これは大部分考えさせられるのであります。六十華嚴の方を私前に読みましたがそこでは、この酷い目にあわせるという、そこだけが出ているのであります。それから前の、波羅門が甘露火王の徳を長々と話すというところは一向六十華嚴には出でていないのであります。そして酷い刑罰を行つてゐるということは、どうしてもこの甘露火王につきものになつてゐるのであります。

そこで考えられるのであります。これはどういうことになるのであります。幻をそこに見せると。この頃私考えますが、こう考え

い山に登らせて、そこから押し落す。或はその者の首を切る。或は腰を。切耳や鼻をそぐ。手や足を切つてしまふ。両方の眼を挑り出す、身体の皮を剥ぐ、その身体をズタ／＼に切る、そんなことをやつて、その人間の骨が山のようになつていて。その流れる血は池のようになつていて。丁度衆合地獄という大地獄を見るよ

うな、そういう光景が眼の前に現れてきたと云うのであります。それから善財童子がそれを見て吃驚します。そして疑う心をおこします。どうもこれが善知識だらうか、こんな残酷なことを王宮の庭でやつていて。大分そこで躊躇いたしますのであります。

その時、空中の声がありまして「そういう疑をおこしてはならぬ前の善知識から何と聞いてきたか。甘露火王が矢張り善知識と聞いて来たであろうが、そのことに間違はない、菩薩というものは不可思議なことを行うものである」という空中の声が聞えてまいりまして、それから善財童子は心をとりなおしまして、その甘露火王の前に進んで行きました例の通りに、菩薩の道菩薩の行いかなる修行をするかということをたずねますのであります。

すると甘露火王は、今のようなことを終つて、善財の手を執つて、王宮の中に連れて行く、そしてそこに坐せるのであります。そして宮殿の中の、これはまた非常に立派な有様を示すのであります。

そして申しますことには、自分は菩薩の如幻解脱、まぼろしの如くに解脱する、こういう風のことを得てある。それで大悲の心をもつて、悪人というものの姿を幻のようになつて見せて、そして國の実際の悪人の前で、そういう有様を示して、國の

ますがどうでありますか。これは甘露火王の心の中の状態を現わす。甘露火王は一面から云え波羅門の述べておるような國の政治を立派にやつてゐるのであるけれども、然しながら、その國にそのような罪人が出来る。その罪人に對して甘露火王の心といふものが激しくなることがある。こんな罪人は焼き殺してしまえとか、首を切れとか、皮を剝いだらどうかというような、非常に残酷に思われるような、そういう心持が動く。その罪といふのを憎む心持といふものをこういう風な云い現わし方をしてゐるのであつて、その罪を憎んで、然しながら、その罪人といふものを、どうかして真人間といふものにしたいという、その心持といふものが十分動いてゐる。それが善財童子を王宮の中に引き入れて立派なところを見せたというのは、その本當は、そういう者を憎む心がおこるんだけれど、こういう者をおさめて、立派な國、立派な世界にしたいという心持が動いているということを象徴的にならわしてゐるのでありますまい。そういうことを感ずるのであります。どうでありますか、これは一つお考えおき頂きたいたと思うのであります。

今頃の法律なり、なんなりで、實際こういうことはやらんのでありますけれど、然し今頃の刑罰でありましても、死刑といふことが問題である。死刑を廢止したらどういうものだらうというような心持も私なども思うのであります。けれども死刑を廢止したらまた悪いかも知れないということをまた考えます。それで刑務所に關係していられます福田さんにお会いして、そんなことを申して見ましたころ、これはこの死刑を執行するということは問題

にしなければならぬけれども、死刑というものがあるということとは矢張り必要なのじやないか。実際執行するということは、問題として考えなくてはならぬと、こういうことを云われるのであります。

死刑の判決を受けたというところが、甘露火王の残酷なところを見せられたというところに今日としてはあたりますかと思いますのであります。それがその人の心が蘇つて来る縁となるということが実際の問題としてあります。そこで、ここはお経ではこうい

うことを述べて象徴的に、ある罪人を本当に遷善せしめるには、こういう風の道も必要じやないかということを示されてあるのじやないかと。甘露火王の国が立派であればあるほど、一面においては、現実の国家社会としてはそれがあるということがありますからして、ここは私共人間の問題として、また法律上の問題として考えさせられますところであります。とに角、善財童子は非常に喜んで、甘露火王に別れて、また次の善知識を訪ねてまいるのであります。

心と真実

佐藤強三郎

第三編 意外な事

第一 艰心の苦惱

信哉は又区長の家へ来た。しばらく滞在するという。それをきいて、善兵衛も捨吉も訪ねてきた。そのち珍しく善兵衛の分家の伴が一人で來た。そして、

「今日は父が病氣で寝て居ますので代つて私が伺いました。

貴方の御留守中に、こんなことがありました。今日はその御札に来ました。本家の善兵衛さんが、母と私を呼んで

『今度少いが、田地三反と山林五反歩、それに今迄の貸金

『捨吉さんを見よ。正しく生きている。金もなく、学問もなく、表彰もされないが、毎日元気よく働いて、正しく生きている。これが本当の幸福だと思う。近頃は信用もついて来たからこれからは善くなるだろう。

絶対の真実とは恐ろしい力を發揮するものだ。まるで仕掛け花火の様に、一個所に火がつけば、ドーン、ドーンと、どこまでも火が移つて行く。まるで原子爆弾が破裂する様だ』と云つていきました』

と話して帰つた。

その夜遅く区長は一人で信哉の室を訪れて、

区長『貴方から家に泊つて貰つて色々お話をききましたがどうしても心からありがたいと思われません。私も六十歳を出ました

捨吉さんは、どうして善兵衛さんの處へ悪びれもせず、立派にあやまりに行かれる様になつたのでしょうか』

信哉『捨吉さんは、始めは恩を受けて喜んでいました。それは返報を求める恩だと思つていたのです。処が善兵衛さんから礼の催促をされ、おまけに、無礼者だ、馬鹿者だと嘲られたので怒つたのです。

善兵衛の恩には、チヤンと紐がついていたのです。そこで最初よろこんでいただけそれが不公平が大きく浮かび上つて來たのです。善兵衛さん自身も気がついて居ないのであります。……

世の中は恩を施せば金や物で相當な礼を返すか、或は無形の心の感謝をするか、そのどちらかをしなければ、治まらぬので

は全部棒引きにしてやる。御婆さん、病氣の見舞は一切返さんでもよい。そんなことを決して心配するな。先代から聞いていた話だが、本家も一時非常に困つたことがあつた。その時に分家が一生懸命になつて守つてくれたのこと、そういう色々の事があつて、今日、本家がこうしていられるのだと思う。前に言つた様にするつもりだから、自分の氣持を受けてくれ』と善兵衛さんがいうのです。母は只泣くばかり、思い懸けない事に、私も頭が下つて涙だけでした。そして善兵衛さんが、なお言うのです。

す。是れは当然の事です。……

そこで二人とも互に面白くないのです。相手が悪いと互に思つてゐるから、顔を合わせるのもいやになるでしょう。話をすらも苦しいでしよう。これではどこまで行つても、平行線ですから問題が解決しないのです。……

然し捨吉は悪いのです。初めから米を貰わなければ、苦しみはなかつたのですが、その時は苦しい処を助けて貰つたのだから、善兵衛にどう思われ様とも、感謝するのは当然の話です。

それまで捨吉は自分は善兵衛よりは、ズット正直な善い人間であると思つていたのです。善兵衛を下等な奴とさげすんだのです。処が人から悪く当られれば悪心をおこすのですから、本当の善人ではなかつたのです。善人が一皮むけば悪人となつたのです。

捨吉は気がついた後、その自分の悪い心を直^{なお}そうと心がけた然し直すことが出来なかつたのです。

自分が心の底から、悪人たる事を知つた時には、世の中の人はみな、自分を見捨てるだろう、呆^{あき}れるだろう、と困つたのです。こう考えることは、五分五分の世の中に於いては当然のことである。

またたとえば、物を盗んだ者が、後で誰に見付けられずともそれは人のものを無断で取つたのですから、人の恩を強奪したわけです。ところよく受けた恩に對してさえも返さねば気が済まぬのが人間ですから、人の物を強奪して、悪いと氣付けば、相手が知

ろうが、知るまいが返さなければ気がすまぬわけでしょう。

そうと自覚したならば、いかに遅くなつても、当然返すべきは返さなければならぬ氣持が起きてくる。これは水が高きより低きに流れるように自然です。世間の外聞と言うよりは自分の良心にすまぬと感じてくるでしょう。それが当然です。

いすれにせよ、自分が悪いと定まれば、またその悪いことが止まぬとなれば、天下何人と雖もあきれないものはないはずです。

悪くてもよいのだ、などと言つて見た処が、誰も相手にするものはないはずです。

ところが、絶対の御慈悲とは、その不実のものをどこまでも呆れないというのです。私共がいかにしても、善くしとおすことの出来ない凡夫であることを深く理解し同情し、あわれむが故に、最早や、如何なる返報をも求めないので。尽十方、無碍光です。この御慈悲に満足させられれば、捨吉さんは、もはや、善兵衛さんとの善し悪しは争う必要もなくなるでしょう。相手が知るうが知るまいが、怒つて居ようが、笑つて居ようが、返すべきだと自覺すれば、何時でも気楽にやれるでしょう。…………

長い話を真剣にきいて居た区長は

「そうですか、それで捨吉さんが、九年目に悪びれもせず、白米貰俵を返したのですね」

区長はお茶を入れ、お菓子を出してもてなした。大方坊は更けて來た。

しばらくして、今度は信哉の方から話しかけ始めた。

信哉「あなたは、片輪で歩けない哀れな人を見たら、どう思いますか。いかに医術をつくしても、どうしてもその片輪は直らぬと定まつたのです。それだのに本人は治りたいと、四、六時中頗つてばかり居るのです」

区長「どうしても治らぬとなれば氣の毒です。どれだけ治りたいと本人がもがいても、治らぬとなれば、いよいよ氣の毒です」

信哉「それでも本人は治りたいで心が一パイです。何とかして治りたいと思つてゐるのです。人から、可哀想である、片輪が可哀想である、などいわれても、本人はチツトも有り難いとは気付かぬのです。

可哀想なら、なぜこの片輪を早く治してくれないのか、と文句を言いたい位に思つてゐるでしょう。…………

私共は自分の宿業のために片輪になつたのです。他人のせいではないのです。治りたくても治らぬから氣の毒なのです。悪くともかまわぬ、と言つてゐるのは、善くしようと思えば善く出来る者の言うことで、本当に善く出来ない者には、悪くてもかまわぬなど、云つて居られるわけがないのです。

借金を返そると云う時に、財布の金を全部出してもなお足らぬので困つてゐると、向うから甘い言葉をかけられるので、

向うの顔色を見て、財布に金はあるが、全部出さずに、かくして置いて、金はありませんから、助けて出して下さいと誤間かすのと、色々の態度が有るのです。

悪くともかまわぬ、というのは、返す金はあるが、出さずに

区長「真宗では悪くともかまわぬといふのでしよう」

信哉「悪くともかまわぬのだと聞いて、それで安心して行かれますか。信仰は人々の心の問題です。人真似では自分の安心になります。自分でハツキリして居なければ駄目でしよう」

区長「悪くともかまわんでは、私はすまんと思います」

信哉「それじや、困るでしよう、落付かないでしよう」

区長「真宗では、そのまま助かつて居るのだ、このままながらのお助けだというのでしよう」

信哉「このままながらのお助けだと聞いて、何の心配もなく、この世を渡り、何の心配もなく死んで行かれましょうか。ただ、そのまま助かつて居るというのでは、世界中、二十五億の人間も動物もみな、そのまま助かつて居るわけになるでしよう」

区長「悪くとも、このままながらのお助けと、平氣で居るのは、何だか図太すぎて氣まがりが悪いようです。またそう云つて、平氣で死なれようとは思われません」

信哉「それじや、困るでしよう。死ぬ時は一人です。そして一人で行くのです」

区長「本当に困ります、心配です。……私は今迄何をきいていたのでしよう。私は悪いから、やつぱり駄目なので助からぬのです。……」

信哉「よくなる事も出来ず、悪い者は駄目だとなれば、結局助からぬわけですね」

区長「だから、困るのです、……」

と悲しそうに下を向いた。

信哉「どんな悪い者でも助けるのでしょうか」

信哉「どんなわるい者でも、決して呆れないのです。絶対に呆れないのです。これこそ五分五分離れた絶対の恩恵です。紐つきではないのです。…………」

その晩、区長は寝てから色々のことを見つめ思考した。
「信哉さんは、金を盗めば、後でその金に利子をつけて返しても、罪の汚名は消えないという。一度片輪になつたものは、治らぬのだ、恐ろしいことだ。治らぬから片輪だという。昔聞いた話を思い出す、…………」

「親の言つたことをきかぬ子があつた。親は子の行末を心配して、正直にせよ、盗むな、乱暴するな、人と仲良くななければ世間が狭くなつて自分が一番困ることになると訓したが、生れつき短気で乱暴の子は、仲々言つことがきかれない様子であるそこで親子相談して、子供が一つ悪いことをしたら、柱へ壹本釘を打つ。その代り、一つ善い事をしたら、その釘を壹本抜き

とふことにきめた。

その後、段々釘の数が多くなつた。ある時、子供はそれを見て、悲しくなつて来た。自分は短気ですぐ怒るが、これは仲々止められそうもない。せめて、呼ばれた時に、立派に「ハイ」と元気よく返事をしよう。これは何にもいらぬ事だから、やうと考へて、早速やり出した。今まで、返事をしなかつたり返事の悪い子が、急に立派に氣持のよい返事をしてくれる。家のなかが明るくなつた様だ。親はよろこんで大いに褒めて、よい返事一つする毎に一本宛柱の釘を抜いた。

その後、その子はだんぐりよいことをするようになつて行つた。親は喜んだ。親の死ぬ頃には、柱にはもう釘はなかつた。親の死後、人が、この柱の釘の話ををして、その人を褒めた。そしたら、いや、釘は無くなつてしまつたが、あの柱の釘の跡が残つてゐる、消えない、と云つて本当に悲しそうであつた』との話である。』

「利子をつけて全部返しても罪は消えぬ、汚名は消えぬ。盗んで知らぬ顔をしていても、自分の良心は知つてゐる。人が自分の物を盗んだら、俺はどうするか。大声でののしり、裁判にも勿論出るだろう。人が知らぬからとて、そのままにして死ねば、人の知らない罪悪を背負うて死んで行かねばならぬ。どこへ行くのだろう。死ぬまで苦悶して居たものに行くところは、苦悶の場所より外はないだろう、苦悶の場所よりないだろう。地獄はない、極楽はないという。誰も見て來たものがない。』

正信偈私解（十九）

依經段の一・弥陀章（一）

白井成允

弥陀成仏の因

法藏菩薩の因位ノ時、世自在王仏ノミモトニ在シテ、諸仏ノ淨土ノ因・國土人天ノ善惡ヲ観見シテ、無上殊勝ノ願ヲ建立シ、希有ノ大弘誓ヲ超發セリ。五劫ニ之ヲ思惟シテ撰受ス。

重ネテ誓フラクハ名声十方三聞コエムト。

（十二卷六号十五頁意訳参照）

南無阿彌陀仏に帰依する御心を告げたまいつつ祖聖ははしなくも法藏比丘を憶い起こしたまうた。是れ即ち祖聖の平生の御述懐に、「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案すれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり、さればそこばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんと思召したける本願のかたじけなさよ」と告げたまえる御述懐のおのずからなる表現である。そして是れ祖聖が「眞実の教」と名づけたま以し『大無量壽經』の真理を伝えたまうのである。『大無量壽經』を説かせたまう時、釈迦牟尼仏は光顔巍々としてまさしく阿彌陀仏の御相を顯わし阿彌陀仏の御德

然し人が眞面目に働いて得た物を、ただ盗んで、それで何にもないですむとはどうしても考えられない。第一、自分が物を盗まれて、それで喜んで居られない。腹が立つ、ただは居ない。どんな宗教でも、道徳でも、物を盗んでよい、とは言わない。盗んでそれでよいと云うなら、盗み得の世界だ。そんなことが人間の世界にあつてよいだらうか。あつたとしたら改めなければならぬ。

自分は今区長だ。少年防犯組合、盜難防止施設と、その筋か

ら、毎度注意も来るし、村でも毎年対策を講じている。明朗な社会を造るための大事な仕事を負わされてゐるではないか。明日も警察から、少年保護、犯罪防止の話をしに偉い人が来ることになつてゐる』

と。こんなことが、後から頭に浮ぶ、もう考えたくない。苦しい。……区長はその夜はなか／＼眠れなかつた。

山中諸生に示す陽明

桃源何れの許にか在る西峰最も深き処漁人に問うを用いず溪に沿うて花を踏んで去れ

（註）会稽山中、陽明洞、洞窟に住む。

を証し示したまうた。今其に示された文に依りて大要を窺うならば――

釈迦牟尼仏曾て王舍城の靈鷲山に在らせられた時、既に如來の正覺を開いて徧く普賢の徳を修めておられた尊い比丘菩薩等が数多く集まられた。その如き会座の一時、仏の光顔巍々として遙かに常に超え、其の威容おぼえず衆を驚かせたことがあつた。それは、釈迦牟尼仏が御自ら此の世にあらわれいでたまえる本来の願の今正しく成就せらるべき時の来つたことを慶ばせたまうたのに由るのであつた。おもえば久しい間道を求める道を伝え教えを宣べてきたのであるが、此の生涯のすべての行言悉く唯一つ群崩を救い惠むに眞実の理を以てせんとするより他に何も存しない。その眞実の理たる南無阿彌陀仏の名号法を明かし示すことが今日の此の会座でできるのだ、仏はこう自らお慶びになら、そして会衆を代表する阿難尊者の切なる願いに對えて説かせたまうた。その説かせ給うた所を今祖聖は憶い起しておられるのである。

思い議ることもできぬ遙かなる古、鎧光如來が世にあら

われ、数知れぬ衆生たちを教え、道を得せしめてお隠れになられた。次々に如來たち五十二仏まで世にあらわれては過ぎておしまいなされた。その次に世自在王如來ともうす私がおでましなされた。その時ひとりの國王があつたが、この仏の説法を聞いて心いたく悦び、上無き眞実の道を求めようとの志をおこし、國王の位を捐てて、ひとりの求道者となり、法藏となつた。世自在王如來のみもとにぬかづき、頌を以て如來の徳の奇しく妙なるを讃歎し、その徳を修め証して自ら亦仏となり、比い無く勝れたる國を建て一切の衆生を攝め、悉く涅槃の安樂を証らしめようとの世に超えたる願いを發し、ために如來の証明を請い、その証明の中に自ら「たとい身を諸の苦毒の中に止こうとも我が行は精進忍辱にして終に悔いじ」と誓ひだもうた。

誓い已りて法藏比丘は世自在王仏に請いまつるに、清淨にして一切衆生を安らかならしめ得るの仏国を建て、嚴るべき行を教え示したまわんことを以てした。その請いに応えて仏は比丘の為に広く二百一十億の仏國を説き、それらの國土の粗なる妙なる・其處に住む人民の善き悪しきをあまねく示したまうた。法藏比丘、之を聞き之を見、上無き勝れたる願をおこし、寂けき御心を以て、五劫の久しきに亘り、その理想の國を建て嚴る清けき行を且思ひ且修めたまうた。事已るや則ち仏に詣でて之を白し、仏の意のままに

との徳の致す所である。

『大無量寿經』の会座に於いて、釈迦牟尼仏はまず凡そ是の如きを説きたまうた。其處に今祖聖は「眞実の教」を見て憶い起こしておられるのである。その憶い起こしておられる所即ち上に掲げまいらせた所であり、其の文の大意は既に六月号に意訳して述べておいたので、今次に上來の所述について諸の愚かなる問答を記してみたい。此はもとより「愚かなる問答」に過ぎない。もとより経文のままに祖聖の憶念のままに之を信すればそれでよいので、恰も冷暖自知する如く、信の一念に在りて是の如きはすべて無要なる閑葛藤を弄ぶものに過ぎないであろう。けれども、信に到る前に、或は信の反省をめぐりて、このような愚かなる問答を要することもある。

問うて曰く、『大無量寿經』は真に仏説であろうか。答う、仏説という、其の義如何か、もし直に釈迦牟尼仏の説きたまうた言葉のままの筆写と解するならば、其の如き意味での仏説が後世に伝わることは不可能であるから、之を仏説と言うことはできないであろう。然らば仏説に非ざるかと言ふに私は直ちに之にも賛同し得ない。今の學界では諸大乘經典が仏滅後數世紀にして編著せられたるものだろうと考えられているので、私も之に従わざるを得ない。然しその故にとて其等は所謂思想家達の自由な創作だと言うことはできない。其等は、釈迦牟尼仏の德化に浴したる仏弟子達の僧伽に伝えられてきた仏の言教の伝承を本にし、其の伝承から流れ出る精神の厳しい反省に立つ思维を経て

己れの所願を述べた。即ち自ら法身を撰め・普く衆生を撰め・清く仏土を攝める・四十八条に亘る願事をある。此の願事を述べ已りて重ねて頌を仏前に説きて、この無上道に至らしめんとの願必ず成るべく、普く諸の貧苦を済うべくその為に我が名普く十方に聞こえざる所無かるべしとの誓を立てたまうた。其に応じて天地を挙げてこれを祝ぎ、法身これを証誠しまつた。

こうして法藏比丘は志を專にして國土を敵りたまうた。其の國は限りなく広く大きく勝れて妙にして衰え変ることなく常に寂かである。比丘は思ひ議るべからざる久しい時に亘つて菩薩の量り無き徳行を積み植えつゝ群生を恵み濟い、迷い悩める者のある処いかなる処にも到りてこれを真実の道に安らわしめ、常に諸仏に敬い供えたまい、一切法に於いて自在なるを得たまうた。

こうして法藏菩薩は、その本の志願を成就して今より凡そ十劫の昔已に無量寿の徳を証して仏と成りたまい、現に此を去ること十万億刹なる西方なる安樂世界に在します。その世界は、菩薩の不可思議なる西方なる安樂世界に在ります。清淨なる不可思議なる境界である。無量寿仏の御身からは無量の光明が照り耀る、その光耀に值う者は諸の煩惱消えて身も意も安く軟らかに歡び喜びて解脱に向うようになるかかる人々、その数限りもない。無量寿仏とその清淨国土

記し出され編み成されたものである。随つて其の表現の上に如何なる相違があるとも——生ける生命が歴史を作る流れに於いて時代や民族やによつて相異の生することは必然である——其等の相異の奥に寧ろ常に一貫して根源的本質的なものの通じ存することが否まれない。則ち釈迦牟尼仏の徳から流れ出た伝承の信であり精神である。則ち之を伝え頤わすものを仏説ということ亦当然であろう。もし釈迦牟尼の徳化が世間に伝わらなかつたとすれば、現に見る如き大乗の諸經典も亦もとより現われ得ようもなかつたであろう。これら諸經典の中には疑もなく原始諸經典に伝えられた釈迦仏の言行そのものが源泉として存し、其の言行の奥に潛み覗られる崇い精神が頤に言い現わされているのである。大乗の菩薩の心行は等しく皆迦釈迦牟尼仏の現身に証したまうた心行の表現に他ならない。其の意味に於いて私は之を仏説と言うて宣しいと思う。仏より出するに非ずして如何にして此の如き教説があり得ようや。

問うて曰く、法藏比丘の願行といい阿弥陀仏の正覚淨土という、是れ一つの神話又は虚構に過ぎないではないか、どうして之を眞実として信じ得よう。

答えて曰く、其の眞実なることは南無阿弥陀仏を聞きまいらせると信ぜざるを得なくなる、即ち念佛もうす心の中に其の眞実が証せられる、是れいわゆる、不可称不可説不可思議なる事実である。然しこう言うだけでは今の疑問は解けないのである。暫く次の如く考えたら如何であろうか。

あとがき

近年にまれな、きびしい冬もすぎて、彼岸も近づき、一陽来春のよろこびを、小鳥も草木も満喫して居ります。

○
知恩院では法然聖人の大遠忌、東西両本願寺では親鸞聖人の大法要が始まられ、遠く米国方面からも参詣されるという知友の通信をうけて、心はずむものがあります。

さて去る二月三十二日は聖徳太子の御忌とて、日曜会、其他で太子を讃仰いたしました。ことに太子の常の仰せ、
『世間虚偽、唯仏是真』
の聖句に、今更のように深く教えられました。これを現代の上に具体的に頂きますと平和主義と、闘争主義と、傍観主義の三つが渦巻いて居ります。然しこれも、不完全な煩惱具足の凡夫としては、そのどこかに身をよせるより外には生きようがないのです。其時、其場の内外の事情に応じて、昨日はあちら、今日は是処と、どこにも落着けないで同じ平面をどうぐ廻りをして、永劫

の流転をくり返して居ります。これが自分を中心とした、虚偽なる世間であり、救いのない永遠の闇路であります。

嗚呼、ここに、常住真実者のひかり、唯仏は眞のまことのいのちががようて下さる「仏かねてしるしめして、煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば、他力の悲願はかくの如きの我等がためなりけり」と、よき人の力でとどけて下さるのであります。

ここに三界に家なき身の、ついのよるべを頂いて、大悲照護の下に、やれるだけのことをやらせて頂くという、光悠久の道がひらけるのであります。

御案内

毎月、一二三日曜午後一時半、一道会。市電新郊通り一丁目下車、東へ一丁半。毎月廿四日午前、午后、昭和区小桜町、教西寺、法話会。市電、御器所通下車。

三月廿一日、四日市々大矢知、真西寺、午后二時。法話会。正信偈、善導章。三月廿六日、午后二時、岡崎市葵川町林福寺、御忌法要。三月廿九日、午前午后、半田市、至信会。三月卅一日知立町牛田、野村家法話会。

定価一部

二十分（送共）

半年

百二十円（送共）

一年

三百四十円（送共）

名古屋市南区駒上町二ノ八八

編集・発行人 花田正夫

名古屋市千種区千種町馬走二八

印刷人 本田政雄

名古屋市南区駒上町二ノ八八

発行所 慈光社

振替口座名古屋一〇四七〇番